

---

# コイツ。幼馴染です。

ポンジュニア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コイツ。幼馴染です。

### 【Nコード】

N8860Y

### 【作者名】

ポンジュニア

### 【あらすじ】

主人公と幼馴染のバカでアホなくだらない会話。

普通です。なんというか普通です。自らを極限まで追い込み、笑わなきゃ死んでしまうぐらいの勢いで見てください。そして、愛想笑いしてください。

## （前書き）

他のサイト様のサークルの企画で書き上げた短編小説です。  
どうか気を楽しにしてご覧ください。

登場人物紹介。

主人公：伏島<sup>ふくしま</sup>新太郎<sup>しんたろう</sup>。 15歳。 男。

幼馴染：志水<sup>しみず</sup>沙希<sup>さき</sup>。 15歳。 女。

誤字脱字。 または感想などがありましたら、ぜひお申し付けください！

この大きな大きな宇宙の中にある、一つの小さな青くて美しい星——地球。

宇宙から見れば小さな地球の中にある、さらに小さな場所——日本。

宇宙から見ればとても小さい地球。その地球から見ればとても小さい日本。その小さな小さな小さな日本の中にある、日本よりもはるかに小さな場所——田舎。

宇宙から見ればとても小さい地球。その地球から見ればとても小さい日本。その日本から見ればとても小さい田舎。その小さな小さな小さな小さな田舎の一角にある、田舎よりもさらにマイクロサイズの茶色い屋根のここが俺のアパート。

宇宙から見ればとても小さい地球。その地球から見ればとても小さい日本。その日本から見ればとても小さい。その小さな小さな小さな小さな田舎の一角にある、田舎よりもさらにマイクロサイズの小さな小さな小さな小さなアパートの3号室の中央付近で布団の上にだらしなく寝ているのが俺で、その俺の部屋のドアをそりやもうぶつ壊れるんじゃないかという勢いでオープンし、不法侵入しながら初代仮面ラ。ダーも真っ青の飛び蹴りでスカートなもんだから桜色した可愛い下着に俺は目を奪われているという事はこれは死亡フラグなりいいいっ!!!!!!!!!!

「はよ進めんかったー！！！！」

「ぶべらっ!?!」

あの青春の男子達がよく使う白黒模様のいわゆるサッカーボール  
よろしく蹴りとばされ、放物線とかそんな可愛いものなどなく壁に  
対して垂直に時速にして約25km近きスピードで頭から突っ込ん  
だ俺。

後頭部強打。頭蓋骨粉碎骨折。首の骨複雑骨折。それに加え全身  
の骨にひびが入った結果、俺は今日限りをもちましてご臨終なう（  
^O^）。

「まったくもう。冬休みだからっていつまでも怠けてると…おい。  
聞いてるー？」

「せ、せめて死ぬ前に……がふっ」

「あ、遺言の途中で死んだ。……生きてるかー？おい」

俺をご臨終にまでいたらしめた当の本人は、全く反省する気ゼロ  
ときたもんだ。

ここで平気そうにしたら俺のこの痛々しいタンコブ達が報われな  
い。こうなったらあいつが謝るまで相手にはしないぞ！！へへへ！  
！ざまあみやがれ！！いい気になるなよこの暴力女め！！

「おい。おい」

「今日の営業は終了しました」

「おい。おい」

「今日の営業は終了しました」

「おーい。違う意味でいつてみー？」

「今日の営業は終了しました」

「さつきと変わらないじゃない。おーい。面白く言ってみー？」

「今日の営業は終了しました」

「……このまま足が滑ってあんたの急所を踏み砕きそうだわ。ねえ。可愛く言ってみ？」

なにっ！？それは困る！！しょうがない。ここは素直に言う事を聞いておこつ。

タンコブの名誉なんかよりも譲れないものがそこにはあるのだ。

「……き、今日の営業は終了しましたダペロン」  
「無し！」

俺の渾身の可愛さを見せつけたのにも関わらず、間髪いれずに全否定されたと同時に男の象徴にこの世の物とは思えぬ刺激が舞い込んで！？

「うつぱ？ § ± Ω ε 7 L ! ! ! ? ! ? 」

~~~~らーらーら　ららーら　言葉にできない~~~~

「——で、なんでお前がここにいる」

この狭い六畳一間の中央で、ブルーパジャマ姿で男のならではの座り方の俺と、さきほどの男差別的な反則技を仕掛けてきた、この頭の中には多分脳が発達していないだろうと思わせる怪力女が俺の頭に両手を伸ばしてこめかみをグリリリリッ！！！！

「いててててっ！！？」

「誰が怪力女ですってー！？」

「ごめんなさい嘘ですあなた様は美人です可愛いです可憐ですうう！！！！！」

「分ければよろしい」

俺の豪快なお世辞で、何とか機嫌を取り戻せたようだ。よかった。

ちなみに俺という俺は伏島 ふくしま 新太郎 しんたろう。15歳。今は冬休みゆえ、温かい布団でヌクヌクしていたんだ。

で、このオシャレして、とても女の子らしく、可愛い服装のこいつが、俺の幼馴染にして隣の4号室に住んでいる志水 しみず 沙希 さき。同じく15歳。

お互い色々あり一人暮らし中だ。

ところで、一つだけサキに聞きたいことがあるんだな。これが。

現在時刻午前三時。なかなか寝付けない夜に起きたこの事件。

昼寝のしすぎで変な時間に目が覚めてしまつて、この小説の冒頭の事を脳内再生していたら起きたこの事件。

俺は大変苦しんだんだぞ。10分間悶絶しちゃったんだぞ。どうしてくれるっ！！って違う。俺の言いたい事はそこじゃないんだ。そう、こんな深夜に、なぜ。

「なぜそんなオシャレしている。」

この俺でさえパジャマ……いや、寝巻なのにも拘らず、なぜお前は。

しかもこの時期にその格好は無いだろう。

スカートにルーズソックス。上はトレーナーを着こんでいるが、足元おるすじや意味がない。見ているこっちまで肌寒いぜ。パジャマだからな。

そんな事より気になるだろう。この異様なファッションが。これは本人に聞くしかないね。

「なぜその格好だ」

「いやー。実はなかなか寝付けなくてさ。」

「で？」

「しょうがないからオシャレしてた。」

……一行足りない。これは言葉として一行分足りないのではないだろうか？

意味不明だ。意味が分からない。俺の脳内の理解の許容範囲を、余裕でオーバーするに値するほどの意味分からなさだ。

これあれだろ。名探偵コ○ンで、『犯人はあなただ！……ふっ。その通りだよ。私だ。』の『あなただ！』がなくなったのと同じだよ。

『犯人は！……ふっ。その通りだよ。私だ。』ってなってしまうのと同じね。

まだ指名される前から、犯人が自白してしまうみたいな感じが。そういえば最近、自白と白目の漢字の区別がなくなったことがあったな。だがそんな事はどうでもいい。

つまりは、一言抜けてる感が半端ないだろ。今まさにそんな感じ。だって沙希の言う事を聞いたまま理解しようとする、寝付けなかったからオシャレした。になるんだよ。これは絶対におかしいだろ。

つまりは沙希はバカだった。

「という結論になった訳なんだが……」

「新太。きみは不幸な人だよ。疑うことしか出来ない憐れな人間。アタシカナシイネ」

「だれだっ！！お前誰だっ！！」

「ワタシアルカ？ワタシハイケヤマシンザエモナル。」

とうとう頭がおかしくなったらしい。やったね。今夜はパーティーだ。パーティーナイトゥ♪フウー♪

「ムシスルナル！！」

「ぐおおお！？」

謎の中国人女性から、水平横チョップ（池山新左衛門バージョン）をくらわされた。

おかげで我がおめめがヒリヒリしまんがな。

いけ好かない奴め。こうなったら寝るしかねえよ。おやすみ。

「あ！？ちよつと新太！！布団にもぐるなあ！！」

口調が元に戻った。コレハヨカタアル。

「おきろー。お前はすでに包囲されているー！！大人しく起きた方が身のためぞー！！」

どうやら俺は、警察の特攻部隊に包囲されてしまったようだ。

つーか寝てるってわかってる奴に何交渉しようとしてるんだよ。

ここは起きる前にこっそりと逮捕するのが得策じゃないのか？

「ほら起きろー。きみのお母さんが泣いてるぞー。……うううたかし……頼むから自首しておくれ……」

どうやら間違えて たかしのお母さんを連れて来てしまったようだ。たかしのお母さんは、息子ではない奴に泣きながら自首をせがんでいる。悲惨だ。

見知らぬ人に自首を求めているいで、息子のたかしに自主勉するようにせがんだ方がいいと思う。そして、なかなか上手い事が言えたので俺は満足だ。

「ふんつ。勝手にすればいいでしょー！！」

「あ、そう？じゃあお言葉に甘えるとしますか。おやすみー」

「やっぱ許さない！！コラ！！早く起きなさい！！コーラぶっかけるわよ！！」

「コーラはやめてくれ。」

「いややる。今家から持ってきてあげるから覚悟しなさい！」

「せめてゼロカロリーにしてくれ」

「うるさい！！たつぷりと砂糖が入ったあつまゝいコーラをあなたにプレゼントフォーユー！！」

そういつて、コーラを取りに俺の部屋から出て行った沙希。

さてと、うるさい奴もなくなったことだし……起きるとしようか。

なにせこれからあつまゝいコーラが運ばれてくるんだ。大人しく寝ている場合ではない。

俺はすぐさま布団から出て、押入れからコタツを出し始める。最近は肌寒いしな。風邪でも引いたらシャレにならん。

「ふっふっふ！！待たせたわねっ！！ってなんで起きてんのっ!？」

戻ってきた沙希が、こたつでヌクってる俺を見て驚いている。

右手にはスティック砂糖を数本。そして左手には2リットルの麦茶。っーかコーラは!？」

「コーラはどうしたんだよ!？」

「それがコーラなかったのよ。だから代わりに麦茶をあなたにプレゼントフォーユー!。」

そういいながら、麦茶に砂糖が入れられていく。  
数十本入れた所で、フタを閉めてよく振りだす。

「シェイク!シェイク!!ジェイク!!!」

「ジェイクとは何ぞや。」

「シェイクの進化形に決まっている」

「どう変化するんだ?」

「シに濁点が付く」

「まんまやがな」

沙希がシェイクすること約3分。シェイクがジェイクに変化する  
ように、麦茶にも泡だった以外に何らかの変化があったことは間違  
いないだろう。

フタをあけて、麦茶(?)をコップに注ぎ始める沙希。俺にぶっ  
かけるんじゃないかったのだろうか?

「はい。どうぞ召し上がれ。」

あっまゝい麦茶を俺に差し出す沙希。俺はそれを受け取り、一口。

「……うわっ！！クソ不味いな！！こら拷問だ！！」

「ふっ！私に喧嘩を売るからそういう目に合うんだ！！」

「なんだこのまずさは！いつもの麦茶の中に程よい甘み。砂糖の量も、この2リットルにはぴったりだ。まるで紅茶だ！麦茶じゃない！！……おかわりを頼む」

これは意外な発見だ。なかなか美味である。まずくはない。これはイケる。

「ふっ！！くるしめえ！！」

「ゴクッ……うわぁ！まずい！！……おかわり」

「ほら。」

「ゴクッ……ぷはぁー！実にたまらん！！もう一杯」

「……ねえ新太。本当にまずいの？」

やっと気付き始めた沙希。今さらだ。

「ああ。まずいよ。なかなかにまずい。これはイケる。」

「どっち！？なんか悔しいから没収！！」

チッ。コップを取り上げられてしまったわ。残念。つーか腹減った。弁当買ってくるべ。

「おい沙希ー！俺コンビニ行ってくるー！」

「最近は未成年は夜うつついちゃダメなの知ってる？」

そうだったや。未成年差別が酷くなったんだった。

「じゃあなんか作れ。腹ぺこやねん」

「ぺこちゃん？おなかぺこちゃん？」

「いや、おなかグーちゃん」

「……バツカじゃないの？」

うわっ！思いつき引かれた！高速道路に飛び出した猫並みにひかれた！！！大事故や！！

とても怪訝そうな顔で俺を見つめる沙希。若干心が傷ついた。

「でも私も腹減った。適当に冷蔵庫あさるわよ？」

「……夜中に食べると太るよ？」

「じゃあやめる。新太は適当に触媒コンタクトの耳でもかじってなさい」

「触媒ちがう。食パンや」

しょうがない。飯は我慢だ。男は度胸だ。ついでに沙希は何してやる。

「おい沙希。貴様は何をしている。」

俺の部屋の引き出しという引出しを漁り始める沙希。この姿はまさに泥棒。コソ泥。空き巣歴14年。前科780犯の犯行だ。間違いない。

「思春期男子中学生ともなると、いけない本とかあるかなあって。ねえ、ないの？」

「そんなもん買う金ないよ。てきばき家計簿マムを見てみる。今月やばいねん。」

これじゃ家計は火の車だ。カッコよく言えばファイアーカーだ。もつとカッコよく言えばfire carだ。

「あんたってホントつまんない男ね。もう別れましょ！」

「付き合ってすらいらないのにどうやって別れると？」

「新太が海外にでも行けばいい」

「お断りだ。」

「お断りをお断りします」

「お断りのお断りをお断りだ。」

「お断りのお断りをお断りするのをお断りします」

「おい。今どつちだ？」

「今は、新太が女体化する結果となりました。」

「しねえよ。いつからそんな話になったんだ。」

「昨日の昼から。」

昨日の昼からなんてくだらないこと考えてやがる。女体化なんかしたくない。

女の体には、自分でなるもんじゃないんだ。他人だからこそ意味がある！！

「なら私の美しい裸体裸体でもご披露してあげましょう！」

そういつて、なんか脱ぎ始める沙希。トレーナーの下からは、寝巻のパジャマが。

なんとという斬新な格好してやがる。

つまり、現時点では上半身パジャマにか半人スカートという謎なファッションだ。世界革命だ。

沙希が無言で、ゆっくりとパジャマのボタンをはずし始めている。風邪ひくぞ。

「ふふふ。ほらほら。脱いじゃうよ？脱いじゃいますよ？」

「おい邪魔だよ。沖縄県知事の選挙演説が見えないだろ。」

「私より選挙演説だっ！？てかテレビついてないしっ！！」

「俺の脳内で演説が始まっているのだ！！」

「……あんた、頭大丈夫？ねえ、大丈夫？」

ぐっ……まさかこの露出狂現行犯に女に頭の心配をされると思  
ってなかった……。

新太郎は精神に500のダメージを受けた！！

「ばっくしよいやい」

今のくしゃみは沙希だ。女の子だからといって、『くしゅん』や  
ら『へくちっ』やら『とうきょうどおむう』などといった可愛いく  
しゃみをすると思ったら大間違いだ。何とも男勝りな力強い爆発的  
くしゃみを女だっけするのだよ。これは常識だ。可愛げなんて異次  
元の向こう側まで飛んで行ってしまっているのだ。

「つーか、風邪引くからコタツ入れよ。今年一番の冷え込みだぞ。  
多分」

「ううう。私はこたつの世話になんかなら……ちよ、体が勝手にこ  
たつに引きよれられていくぅー！！はあ。」

わざとらしい演技をしながら、こたつに肩までもぐりこむコイツ。  
思いつきり世話になつとるがな。

「それにしても寒いなあ。雪とか降ってるんじゃない？」

こっ寒いとみかんが食べたくなるな。みかんが。

「え？新太知らないのお？外は大雪で嵐で台風で砂嵐なんだからあ  
どうやら外は異常気象に満たされているようです。バカか。」

「でも正直な所、めっさ雪降ってるよ?」

「ああ。知ってるよ」

昨日から雪は降り続け、周りは白銀の世界。

「銀ぎつねの群れじゃないの?」

アホな奴がバカなみたいな発言をしている。もちろん無視だ。

ちなみに、俺は昨日は楽しすぎて、一時間近くかけて大型の雪だるまを作ったんだ。沙希に2秒で壊されたがな。

「そうそう、みかんあるう?」

突然沙希が起き上がり、だらけた声で聞いてきた。こいつの心はもうコタツに支配されているようだ。温かくて、気分がよくなったのだろ。小さいあいいうえおを使いだした。

「みかんはある。」

「えつどこ!?」

「愛媛県へGO」

「うん分かった。新太をぶっ飛ばせば出て来るのね?」

「やあめてくだしゃあい!ごめえんなしゃあい!」

慌て過ぎて発音が崩壊してしまった。これじゃしゃくれている人だ。

あ！？いいか！！俺はしゃくれてないぞ！いいな！？断じてしゃくれてはいない！！神に誓う。ついでに母さんに誓う。え？父さん？なにそれ。食えんの？

「山手線ゲーム！新太のアホな所！！」

突如山手線に乗車したバカが約一名。リズムカルに両手で音を鳴らし、沙希がノリノリで答える。

「名前！はいはい」

おいこら、ぶっ飛ばすぞ。俺の名前をコケにするな。コケコッコ

「ほら新太だよ！はいはい」

「幼馴染。はいはい」

「ちょっと！それどーゆー意味よ！」

「ちょっと！それそーゆー意味よ！」

沙希の顔が、まるで幼稚園児でも見るかのような顔に変化する。もうこれは顔芸だ。

沙希が気を取り直し、俺にとっては自虐でしかない山手線に再度乗車させられる。

「続けるわよ。……顔面！はいはい」

「女運。はいはい」

「女々しい！はいはい」

「女々しくねえよ！俺は立派な男だ！男子だ！青春だああ！！！」  
「！」

「なにアホなことおっしゃいますかお代官様あ。ふっふっふ。越後谷。お前さんこそあ」

「どうやら越後谷とお代官様がアホのなすりつけ合いをしているようだ。笑顔で相手をつねっている様が目に浮かぶ。  
っーか眠いな。」

「はあー！眠くなってきたから寝るわ。おやすみ」

「寝るなし！と言いたいけど私も眠いから寝るわあ」

「こたつで寝るなし」

「お構いなくー」

「お構いありー」

「うるさいわね。あんたなんか鍋焼きうどんの鍋になればいいのよ。」  
「」

眠気で頭がやられているらしい。俺はどうやら鍋になったようだ。

「ならお前はバナナの皮になってしまえー」

「ならあんたはオカマバーの定員になってしまえー」

それってオカマじゃねえか！！モノホンのマカオじゃねえか！！

「あら、オカマをなめてると大変なことになるわよ？オカマには伝説があるんだから」

「なんだ。」

沙希が語り始める。

「ある夜の事。腹をすかしたおじいさんの為に、おじいさんが山へ紅葉狩りに出かけました」

「ホワアイ！？」

おい婆さんや。何か作って差し上げる。爺さん頑張って自分の食料確保し行こうとしとるやないか。

てか爺さん。紅葉狩りに出かけて何を食う気だ。その辺の葉でも食すのか？

「おじいさんは収穫がなく、手ぶらで家に帰ると、おじいさんに殴られました。」

まさかのジジイの二人暮らしだったの！？同棲してたのー！？ジジイαの為にジジイβが頑張ってたのーっ！？

「つーかかつこいいな。ジジイα（アルファ）とジジイβ（ベータ）。ジジイZ（ゼータ）も現れるといいな。」

「『わしゃ栗が食べたいゆう取ろうが！！』殴るおじさん。『でも冬に栗は無いんじゃないけえ』とおじいさん」

しかもまさかの冬かよ。

てかちよつと待って！おじさん出て来ちゃったよ！？おじいさんじゃなくおじさん出て来ちゃったってばよ！？殴るおじさん現れちゃったナリよ！？

「なのでお釜の中にある栗ご飯を二人で舐めまわしましたとき。めでたしめでたし」

「オカマってそっちのお釜かよ。つーか伝説は？」

よだれ垂らしながら、ジジイ二人が釜に頭を突っ込んで舐めまわす光景。まるで世界の新喜劇や。  
いや、俺の脳内が悲劇や。

「これが噂のお釜王ハットリ君伝説」  
「いみがわあからあゝん」

つーか眠い。

「おい沙希。俺は寝るぞ。」  
「スपीー。」

もっねてるー！！  
スपीーって言いながら寝る人初めて見たや。

そんな幼馴染と一緒に、俺はゆっくりと横になり、眠るとしようか。

ただ、とてつもない睡魔に襲われている俺は、部屋の電気点灯済み。こたつ起動済み。なぜだか冷蔵庫がフルタイムオープンなのに気付かなかった。

今月の電気代を見て、その時俺は初めて気付くのだろう。それまで幸せな時間を……グッナイ。俺。

完

（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

今から約3秒間、愛想笑いをお願いします。

よいドン。

・ ・ ・ ・ ・

はい。笑ってくれた方、ありがとうございます。  
普通にスルーされた方、ちょっと悲しいよ俺。

それでは、またどこかで。

ポンジュニアでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8860y/>

---

コイツ。幼馴染です。

2011年11月26日17時48分発行